SAISON TECHNOLOGY

「熟練者のノウハウ」を、現場が動く「データ資産」へ

製造業のためのデータマネジメント改革

熟練者依存・システム分断・データ漏洩リスクという「製造業の三重苦」を乗り越え、
持続可能なデータ活用基盤を構築する

01

「熟練者のノウハウ」を、現場が動く「データ資産」へ

はじめに

技術継承の危機は、製造業DXの「成否」を分ける分岐点

日本の製造現場では、長年の経験から培われた高度な技術を持つ熟練者に頼りきっている現実があります。彼らの頭の中にある匠のノウハウは企業にとって最大の競争力ですが、それが「データ化されていない」ことは、企業の存続を脅かす重大なリスクです。熟練者が退職などでいなくなれば、長年蓄積されたノウハウも同時に消滅してしまうからです。熟練者頼りは、もはや無視することのできない事業リスクとなっています。

こうした課題を解決すべく、多くの製造業がIoTセンサー、AI、PLM（製品ライフサイクル管理）システム、MES（製造工程管理）などの最新のデジタルツールを導入してきました。デジタル技術による工程革新は目覚ましく、現場の道具は充実したはずです。
では、なぜ現場の課題は根本的に解決しないのでしょうか。

その答えは、「現場のノウハウがデータ化されていない」こと、そして導入したシステムが連携せず「無秩序なデータ管理」に陥っていることにあります。各システムがそれぞれ独立して稼働し、ベテランの「頭の中」にあるノウハウが構造化されないまま眠り続けている。この「データの分断と属人化」こそが、製造業DXが成果に結びつかない本質的な原因です。さらに近年では、業務効率化を目的に従業員が個人判断で無許可のAI（シャドウAI）に機密情報を入力してしまうなど、情報漏洩リスクも増大しています。

本書では、この根本課題に向き合い、「熟練者のノウハウ」を企業の「データ資産」へと変えるための、製造業向けデータマネジメント改革をご紹介します。分断されたシステムを繋ぐデータインテグレーション戦略によって、単なるツール導入では終わらない、現場が本当に強くなる「データ資産化」の実現に向けた具体的なアプローチをお伝えします。

INDEX 目次

01 はじめに

02 製造業DXを阻む、5つの構造課題

03 「現場×データ連携基盤」が課題解決の鍵

04 製造業の業務プロセスに対する全体アプローチ

05 データ連携が実現する「次世代製造現場」4つのユースケース

06 個別開発ではなくiPaaSによるデータ連携が良い理由

07 製造業のデータを守る——セキュリティの課題と解決策

08 優秀なiPaaSとしてHULFT Squareが選ばれる理由

02

「熟練者のノウハウ」を、現場が動く「データ資産」へ

製造業DXを阻む、5つの構造課題

「熟練者頼り」やデータの分断により現場が抱えるリスク

製造業界では、品質管理、生産管理、設計開発などの領域に「熟練者」が存在します。長年の経験から培われた直感的な判断力や微妙な技の加減は、マニュアルには書かれておらず、本人の「頭の中」にのみ存在。この属人的なノウハウへの依存こそが、製造業が抱える最大のリスクです。

また、こうした課題の解決として各部門でシステム導入を進めた場合も、部門横断的なデータ活用を目指す段階で、システムやデータの分断が大きな壁となります。こうしたノウハウやデータのサイロ化も、現場の連携を阻み混乱させる要因の一つです。

5つの構造課題

課題01　匠のノウハウが未データ化

- 設計書·品質記録が各拠点システムに分散
- 手書きメモや口頭での技術伝承が主流
- 類似トラブルの解決策を探すのに数日を要する
- 退職とともにノウハウが消滅するリスク

課題02　経営層が事業リスクを過少評価

- 「まだ大丈夫」という楽観的な認識が根強い
- 技術継承の失敗コストが可視化されていない
- 後継者育成の緊急性への認識不足
- 属人化リスクが財務リスクとして認識されない

課題03　データ活用の未来像が見えない

- DXの目的が「ツール導入」にすり替わっている
- データ活用による成功体験の不足
- ROIが見えずに投資判断が先送りされる
- 現場と経営層のデジタル認識ギャップ

課題04　無秩序なデータ管理

- 部門ごとにバラバラな管理ルール
- 30年分の設計図面が各拠点に分散放置
- データ形式の非統一でシステム連携が困難
- マスターデータの重複·不整合が頻発

課題05　増大する情報漏洩リスク

- サイバー犯罪被害の深刻化
- シャドウAI利用による機密情報の無断入力
- 設計図面や製造ノウハウなど、重要知的財産の流出
- データの出口管理とガバナンス設計

これらの構造課題によって、製造現場では次のような深刻な問題が日常的に発生します。

具体例1：熟練者の退職後、マニュアル通りでも不良品が急増

ある工程の品質を担保していた熟練者が退職。後任が手順書通りに作業しても、機械の僅かな変化に合わせた「微妙な技の加減」がわからず不良品が急増などの事態に。ノウハウはマニュアル化されず、熟練者の「頭の中」にしかないため、ノウハウが消滅したことで、元の品質水準を取り戻すまでに多大なロスが発生します。

具体例2：過去の設計図面が見つからず、数日のロスが発生

各拠点に分散した過去30年分の設計図面や品質記録は、必要な時にすぐ探し出せません。特にPDFや紙ベースの図面は検索性が低く、類似トラブルの解決策を探すだけで数日を要することも。結果、業務が停滞するだけでなく、過去の失敗を活かせず同じ不具合を繰り返す原因となります。

⚠「熟練者頼り」やデータの分断は無視できない企業リスク。

03

「熟練者のノウハウ」を、現場が動く「データ資産」へ

「現場×データ連携基盤」が課題解決の鍵

製造業におけるDXの最適解

これまで多くの製造業においては、自部門の課題を迅速に解決するために、個別最適でのシステム導入や業務改善が進められてきました。それ自体は現場の生産性向上に確かな効果をもたらし、不可欠な取り組みだったと言えます。しかしその一方で、部門ごとに最適化された仕組みは分断を生み、データやノウハウが組織全体で活かされにくいという新たな課題も顕在化しています。さらなる競争力強化を目指す上では、こうした個別最適を前提としつつも、部門を横断してデータとプロセスをつなぐ視点が不可欠です。

製造業DXの真の目的は、便利なSaaSやアプリを導入すること（点のDX）ではありません。分断されたシステムを繋ぎ、「ノウハウがデータとして蓄積され、データが自然に流れ、無駄がなくなり、現場が強くなること（線のDX）」です。研究開発、設計、生産準備、製造、品質管理、そして引き渡し後のアフターサービスに至るまで、すべてのプロセスを「製品」という軸で繋ぐデータ基盤を構築することで、初めて企業としての競争力が高まります。

業務シーン	点のDX（SaaS乱立・部分最適）	線のDX（データ連携後）
設計・開発	部署ごとに最適な文書管理ツールを導入し、業務効率は向上。一方でデータがサイロ化し、横断検索が難しく、結果的に手作業での探索も発生	ETL自動変換でリアルタイム一元管理
設備・品質管理	拠点ごとに最適な設備監視ツールを導入し、現場の可視化は進展。ただしデータ形式が異なるため、本社での統合集計はExcelによる手作業が中心	データ連携で即座に類似設計を発見・活用
調達・在庫管理	在庫SaaSや受発注システムの導入により、各業務の効率化は実現。一方でシステム間連携がなく、複数画面での確認や手入力での転記が発生	AIチャットにより誰でも即時確認可能
技術継承	ノウハウのPDF化・動画化により、形式知としての蓄積は進展。しかし検索性や文脈連携が弱く、十分に活用しきれていないケースも多い	構造化データとして企業資産に蓄積
情報セキュリティ	現場主導で生成AIの活用が進み、業務効率化に寄与。一方で管理が分散し、機密データの扱いがブラックボックス化するリスクも存在	データ分類・管理で安全なAI活用を実現

技術継承への対応は、たしかに喫緊の課題です。しかし、それは同時に、自社のデジタル基盤を未来仕様にアップデートする絶好の機会でもあります。

現場のデータを連携するiPaaS「HULFT Square」

現場から入力されたデータを、裏側で各種SaaS・基幹システム・PLM・MES・品質管理システムへ自動的に振り分け・連携する役割を、セゾンテクノロジーのデータ連携プラットフォーム「HULFT Square」が担います。HULFT Squareはクラウド型iPaaS（Integration Platform as a Service）として、オンプレミスやクラウドなど、あらゆるシステムに散在するデータを繋ぐプラットフォームです。ノーコードで直感的に連携フローを構築できるため、IT人材が不足している製造業界でも導入・運用が可能です。

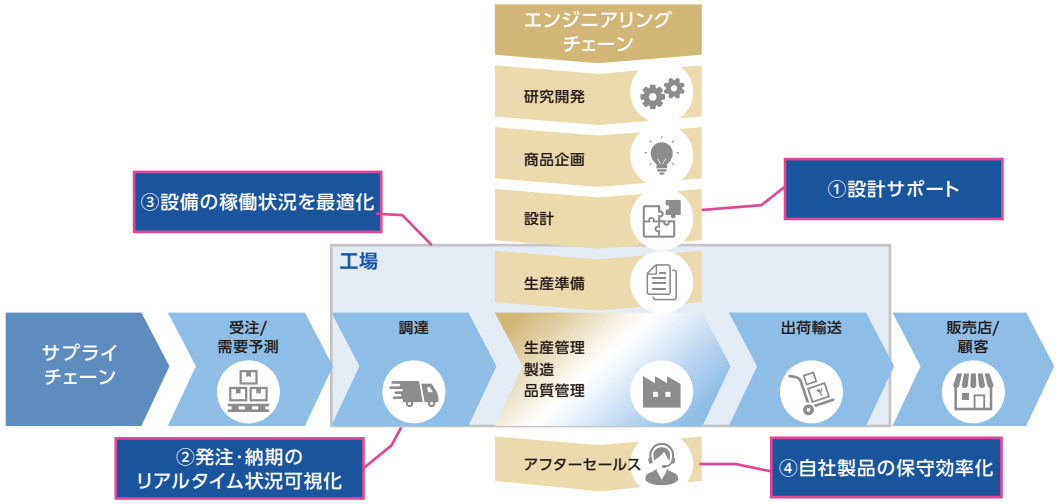
たとえば、現場の検査担当者がシステムに品質データを入力すれば、そのデータが自動的に品質管理システムに反映され、同時にベクトルDBに蓄積され、類似不具合の検索や予兆検知に活用される。これが製造業で真に必要とされるDXです。

04

「熟練者のノウハウ」を、現場が動く「データ資産」へ

製造業の業務プロセスに対する全体アプローチ

データ連携基盤が次世代製造現場にどのような変化をもたらすのか



製造業の業務プロセスは、研究開発や商品企画、設計、生産準備へと連なる**「エンジニアリングチェーン」**と、受注から調達、製造（工場）、出荷、販売、アフターセールスへと至る**「サプライチェーン」**という、2つの巨大な流れから成り立っています。

実際の現場には、設計部門のPLM、製造現場のMES、調達・バックオフィスのERPなど、各工程に特化した最適なシステムが導入され、日々の業務を力強く支えています。次のステップとして求められるのは、こうした「各現場の最適解」から生み出されるデータを掛け合わせ、より広い視野でチェーンの「全体最適」を図ることです。しかし現状は、これらのシステムが連携しておらず、「部門ごとのデータの分断」が全社的なデータ活用を阻む障壁となっています。

真の製造業DXを実現するためには、特定の部門や単一の工程の効率化にとどまる点のDXから脱却しなければなりません。設計から製造、そして引き渡し後の保守に至るまで、製品のライフサイクル全体を通じてデータがシームレスに流れる仕組みの構築が欠かせません。すなわち、エンジニアリングチェーンとサプライチェーンを横断し、各部門に散在するシステムをデータ連携プラットフォームで串刺しにするアプローチが求められます。

こうした全体最適の視点を持つことで、例えば「工場で発生した品質不良データを設計部門にフィードバックする」「設計変更の情報を即座に調達部門と共有し、部品発注の遅れを防ぐ」といった、部門の垣根を越えた連携が可能になります。

この「製造業の業務プロセスに対するアプローチ」に基づき、特にデータ連携の効果が現れやすい下記4つの領域において、データ連携基盤が次世代製造現場にどのような変化をもたらすのか、具体的なユースケースを通じてご紹介します。

USE CASE

- **開発・設計**
- **生産（設備稼働）**
- **調達**
- **保守・アフターセールス**

05

「熟練者のノウハウ」を、現場が動く「データ資産」へ

データ連携が実現する「次世代製造現場」4つのユースケース

4つの具体的なユースケース

ここでは、「製造現場×データ連携基盤」が実際にどのような変化をもたらすのか、4つの具体的なユースケースを通じてご紹介します。

USE CASE 1 開発・設計

設計業務の高度化・効率化	過去の設計書・実績を自然言語で即座に参照 図面データにメタデータを自動付与
解決策	・HULFT Squareで各部署の設計書・品質記録・発注実績を一元集約 ・生成AIモデルがPDF・CADデータからメタデータを自動抽出 ・チャットボット型UIで担当者が自然言語で設計書を検索・参照 ・新規作成した設計書も自動でデータソースに追加される仕組みを構築
導入効果	・類似設計の検索時間を劇的に短縮 ・過去の不具合情報を設計フェーズで活用し、品質向上を実現 ・退職者の知見もデータとして蓄積し、技術継承を恒久的に確保 ・新規案件の見積作成のスピード向上

新製品の設計や見積作成時、過去の類似設計書や品質記録を探すために数日を費やすケースは少なくありません。このユースケースでは、各所に分散保管されたPDFや紙の図面データをHULFT Squareで一元集約し、生成AIによるメタデータ付与の前処理を自動化。これにより、設計担当者は自然言語によるチャット形式で必要な設計情報を即座に検索・参照でき、検索時間を劇的に短縮しました。迅速な見積作成や、過去の不良情報を活かした品質向上を実現します。

USE CASE 2 生産（設備稼働）

設備監視・品質管理の最適化	各工場の稼働状況をリアルタイムで一元管理 工場間のデータ形式の差異をETLで自動吸収
解決策	・各拠点の設備データをHULFT SquareのETL機能で形式変換・一元集約 ・プラント管理システムへの投入口を一本化し、インターフェース数を削減 ・工場設備の運転条件と品質特性の相関から異常状態を事前に検知 ・BIツールと連携したリアルタイムレポートを自動生成
導入効果	・品質不良を事前検知し、廃棄ロスと手戻りコストを大幅削減 ・ベテランのノウハウ（匠の感覚）を定量データとして可視化 ・レポート作成の手間を軽減し、データ分析に集中できる環境を実現 ・リードタイム・ボトルネックの改善で製造コストを最適化

工場ごとに設備データのフォーマットが異なり、本社での一元的な稼働状況の把握や分析が進まないといった課題がありました。HULFT SquareのETL機能を活用し、複数拠点から上がってくる異なる形式の設備データを自動で変換・加工し、プラント管理システム等へ一本化して投入。データ投入前の手作業をなくし、設備稼働と品質特性の相関関係から異常を事前に検知することで、廃棄ロスや手戻りコストを大幅に削減します。現場の負担を最小化しながらデータドリブンな経営判断を支援します。

05

「熟練者のノウハウ」を、現場が動く「データ資産」へ

データ連携が実現する「次世代製造現場」4つのユースケース

USE CASE 3 調達

調達・在庫管理のリアルタイム可視化	生産状況・調達状況をAIチャットで即時確認売 上計上リスクを自動検知・アラート
解決策	・PLMシステム・在庫管理・受発注システムのデータをHULFT Squareで統合 ・生成AIが生産状況の可視化レポートを自動作成（最新状態に常時更新） ・チャットボット形式で部品在庫・調達時期・納期状況を即時確認 ・接続先の柔軟性があり、将来的なシステム拡張にも対応可能
導入効果	・必要部品の調達遅延を予兆段階で検知し、生産ライン停止リスクを回避 ・調達状況の確認に専門知識が不要になり、現場社員の自律的な判断を支援 ・長期製造品目における納期管理の高度化で、決算・IR対応の確実性が向上 ・売上計上リスクを最小化し、財務の透明性を強化

多岐にわたる必要部品の調達状況や在庫の確認には、専門知識や複数システムへのアクセスが必要となり、現場の迅速な判断を遅らせる要因となります。本ユースケースでは、PLMや在庫管理、受発注システムのデータをHULFT Squareで統合し、生成AIと連携させました。現場社員や経営層は、チャットボットを通じて「来週使う部品の在庫はあるか？」と自然言語で尋ねるだけで、即座に最新状況の把握が可能です。調達遅延によるライン停止リスクを未然に防ぎ、生産効率を向上させます。

USE CASE 4 問い合わせ対応業務

問い合わせ対応・アフターセールスDX	チャットボットで対応時間を大幅短縮 非構造化データをAI回答生成に活用
解決策	・製品情報（DB）・マニュアル（PDF）・顧客情報（CRM）をHULFT Squareで前処理・統合 ・iPaaSのデータ前処理で非構造化データ（PDFマニュアル等）の精度を向上 ・ベクトルDBへのRAG投入用データ加工を自動化し、回答精度を継続的に向上 ・問い合わせの一次対応を自動化し、複雑なケースのみ担当者にエスカレーション
導入効果	・問い合わせ対応時のデータ探索時間を削減し、解決スピードが大幅に向上 ・担当者の業務負荷を低減し、より価値の高い顧客対応業務に集中できる環境を実現 ・サポート品質の標準化・向上により顧客満足度が改善 ・蓄積された問い合わせデータを製品改善・設計フィードバックに活用

顧客からの問い合わせ対応において、製品マニュアル（PDF）や顧客情報（CRM）、過去の対応履歴などが分散していると、回答の作成に多大な時間を要します。この課題に対し、HULFT Squareのデータ前処理機能を活用し、非構造化データを含む社内ナレッジをベクトルデータベースへ自動加工・統合（RAG構築）します。高精度なAIチャットボットが一次対応を自動化することで、オペレーターのデータ探索時間を大幅に削減。サポート品質の標準化と顧客満足度の向上を実現します。

06

「熟練者のノウハウ」を、現場が動く「データ資産」へ

個別開発ではなくiPaaSによるデータ連携が良い理由

● API連携による個別開発の限界

システム間を繋ぐ際、都度APIを個別開発（手組み）する手法は、短期的には解決策に見えても、長期的には深刻な技術的負債となります。その問題は主に2つに集約されます。

①属人化によるブラックボックス化

手組みで開発したAPI連携は、コードの記述ルールや詳細な連携仕様が開発担当者の頭の中にしか存在しないケースが少なくありません。担当者の異動や退職が発生した途端にシステムがブラックボックス化し、トラブル時の原因究明や復旧が大幅に遅れるリスクを常に抱えることになります。製造業においては、生産ラインに直結するシステムへの影響が致命的になりかねません。

②アップデートに伴う保守コストの肥大

現代のビジネス環境ではSaaSの活用が前提ですが、クラウドサービスは頻繁にアップデートが行われます。手組みのAPI連携では、連携先の仕様変更が発生するたびに、プログラムの調査・改修・テスト作業に追われることになります。維持するだけでIT部門のリソースが奪われ、終わりのない「仕様変更地獄」に陥りがちです。

● ノーコードiPaaSの効果

この課題を突破するのが、「ノーコードiPaaS（クラウド型データ連携基盤）」という選択肢です。プログラミング不要で多様なシステムを視覚的につなぐことができるため、開発工数と運用コストを大幅に削減できます。

ノーコードiPaaSでは、頻繁に利用されるSaaS連携の処理フローがあらかじめテンプレート化されており、テンプレートを選択して簡単な設定を行うだけで利用が可能です。IT人材が不足している製造業においても、情報システム部門だけでなく、現場部門が自ら連携フローを構築・修正できる「自走する体制」を実現できます。

比較項目	個別開発（手組み）	ノーコードiPaaS (HULFT Square)
開発工数	数週間～数ヶ月	**数日～数週間**
保守性	属人化・ブラックボックス化リスク大	**フロー可視化で引き継ぎ容易**
仕様変更対応	都度改修が必要	**テンプレート更新で対応**
IT人材要件	エンジニアが必須	**現場部門でも運用可能**
拡張性	連携増加で複雑化	**段階的に拡張可能**
セキュリティ	個別実装が必要	**標準機能として提供**

07

「熟練者のノウハウ」を、現場が動く「データ資産」へ

製造業のデータを守る――セキュリティの課題と解決策

製造業が抱えるセキュリティリスク

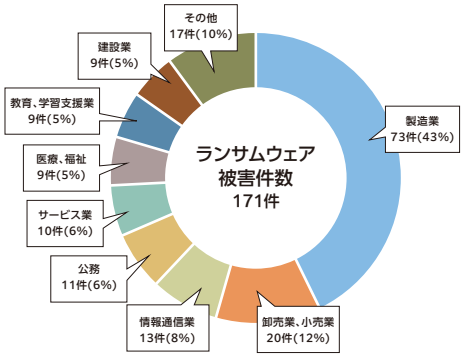
2024年のサイバー犯罪による損害額は9.5兆ドルにも上ります※1。製造業・情報通信業では被害件数が全業種中で最も高く、設計図面や製造ノウハウといった知的財産は、サイバー攻撃者にとって非常に価値の高いターゲットとなっています。

特に近年では、企業が公式に許可・管理していない生成AIの利用拡大に伴い、情報漏えいリスクも顕在化しています。海外の調査では、生成AI利用者の約77%が業務データを入力しており、そのうち約22%が個人情報などの機密性の高い情報を含んでいると報告されています。また、生成AIにアップロードされたデータの約40%に機密情報が含まれていたという指摘もあります※2。こうした背景から、多くの設計部門では、「過去30年分の設計図面や品質記録が各拠点に分散して探し出せない」という課題 と、「シャドウAIによる機密漏洩リスク」という大きなジレンマを抱えています。

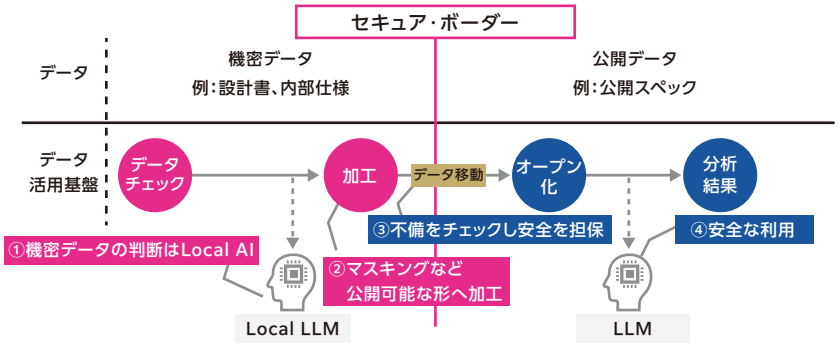
HULFT Squareのデータマネジメント：情報漏洩を防ぐセキュリティの安全設計

製造業におけるデータは、その機密性によって適切に分類・管理される必要があります。設計図面や内部仕様などの「機密データ」と、製品カタログなどの「公開データ」では、扱い方が根本的に異なります。HULFT Squareを用いたデータ連携基盤では、データの重要度に応じた適切なガバナンス設計が可能です。

LocalAIによる機密データの自動判別、マスキングなどの加工処理、そしてセキュリティのサイトラインを安全に越えるためのデータ移動管理を一気通貫で実現。機密性の高いデータが検知された場合には管理者への自動通知も行われ、情報漏洩リスクを最小化します。



図Ⅱ-10　ランサムウェア被害組織の業種別割合



データ分類	対象データ例	システム環境	管理方針
機密データ（高）	設計図・CAD・顧客情報	オンプレミスベース（PLM・基幹）	権限変換・ダウンロード禁止・アクセスログ記録
機密データ（中）	草案・テストデータ・作業中文書	社内管理システム	取り扱い注意・限定共有・マスキング処理
機密データ（低）	製品カタログ・過去技術事	クラウドベース	AI利用可能・メール送付可・外部共有可

※1.出典 Cybersecurity Ventures「Global Cybercrime Damages」(2024年) ※2.出典 LayerX「Enterprise AI and SaaS Data Security Report」(2025年)

07

「熟練者のノウハウ」を、現場が動く「データ資産」へ

製造業のデータを守る――セキュリティの課題と解決策

●実践例

1 Local AIによる安全な「機密レベル自動判別」

HULFT Squareが社内のPLMやMES、ファイルサーバーなどからデータを自動収集。その際、パブリックなクラウドAIにデータを渡す前に、まずはセキュアな閉域環境にある「Local LLM」がファイルの中身を読み取り、機密レベルを「高・中・低」に自動判別します。

2 レベルに応じた「自動加工」と「アクセス制御」

判別結果に基づき、HULFT Squareがデータを適切に処理。例えば、機密レベル「中」のデータであれば、個人情報や専門情報のマスキング処理を自動で施します。機密レベル「高」（設計図やCADデータなど）のデータが検知された場合は、管理者にSlackやTeams等で即時通知を行い 、「ダウンロード禁止」設定がされたセキュアなフォルダへ自動で振り分けます。

3 AIによる「安全・瞬時」なナレッジ検索

事前にガバナンスが効いた状態で整理・加工されたデータだけがあらかじめ設定された所定の場所に格納されます。現場の技術者は、「この部品の過去の不具合事例は？」とAIに自然言語で質問するだけで、自社の機密情報を意図せず外部のAIに学習させる心配なく、安全に過去のナレッジを引き出すことができます。

このように現場が安心して
生成AIの恩恵を受けられる環境を、
次の仕組みで構築します。

08

「熟練者のノウハウ」を、現場が動く「データ資産」へ

優秀なiPaaSとしてHULFT Squareが選ばれる理由

ミッションクリティカルな製造現場を支える安定性

データ連携基盤は企業の「神経網」となるため、止まらない安定性と高いセキュリティが求められます。
製造現場のデータ（設計図、品質記録、設備稼働データなど）は遅延や喪失が許されません。

POINT 1

安全・安心の国産iPaaS

HULFT Squareは、さまざまな業界のデータ活用課題を解決してきたセゾンテクノロジーが開発した国産iPaaS。手軽に導入できる上、豊富なコネクターやアプリケーションが用意されており、プログラミング不要で多様なシステムを視覚的につなぐことができるため、専門的な知識がなくてもデータ連携をかんたんに実現できます。

POINT 2

ノーコードで現場部門が自走できる

プログラミング不要のアイコン操作で連携フローを構築。IT人材が限られる製造業においても、情報システム部門だけでなく現場部門が自ら連携フローを構築・修正できる「内製化」を実現します。150を超える接続先への対応と豊富なコネクターにより、既存システムへの影響を最小限に抑えながら段階的に拡張できます。

POINT 3

生成AI・BIツールとのシームレスな連携

将来的な生成AIの活用、BIツールでの分析、新たな外部システムとの連携が必要になった際も、基盤側で柔軟に吸収が可能。「今」の課題解決だけでなく「未来」のビジネス変化にも対応できる拡張性を備えています。

POINT 4

導入前後も充実のサポート体制

サポートサービス業界で最高ランク「三つ星」を獲得した充実のサポート体制（24時間365日対応）を提供。国内ベンダーならではの迅速かつ手厚いサポート体制が製造現場を支えます。さらに導入基盤の構築、運用支援といったワンストップでのサービスも提供可能です。

個別相談・アセスメントのご案内

「30年分の設計書が各拠点に眠っており、必要な情報を探すのに数日かかる」
「熟練者が退職したら同じ品質が保てるか不安だ」
「各工場のシステムがバラバラで、本社での一元管理ができていない」
「生成AIを活用したいが、機密情報の漏洩が心配で踏み出せない」
「手組みのAPIが多く、SaaSの仕様変更のたびに保守対応に追われている」

このようなお悩みをお持ちではありませんか？
データ連携を用いたDXは「ツールを導入して終わり」ではありません。全体設計なき「とりあえず連携」は技術的負債を生み出します。DXを確実に成功させるためには、「どこから、どのデータを、どう流すか」という事前の設計（アセスメント）が不可欠です。
セゾンテクノロジーでは、製品の提供にとどまらず、専門コンサルタントがお客様に伴走する「データ連携アセスメント」を実施しております。

● 導入支援3ステップ

STEP 1：現状アセスメント
現行のシステム相関図やデータの流れを可視化し、重複や不整合などのボトルネックを特定。

STEP 2：連携方針の早期定義
将来のシステム拡張を見据え、PLMやMES、基幹システムの特徴に合わせた疎結合な全体アーキテクチャ方針を策定。

STEP 3：製造業特有パターンのテンプレ化
複雑な品目コードや工程管理など、製造業ならではの処理をパターン化し、基幹システムの軽量化と柔軟性を両立するロードマップをご提案。

技術継承の危機は「迫っている脅威」であると同時に、システムを未来仕様にアップデートする絶好の機会でもあります。
貴社の「データ資産化DX」に向けた次の一歩を、ぜひ私たちにご一緒させてください。まずは、お気軽にご相談ください。

SAISON TECHNOLOGY

株式会社セゾンテクノロジー
https://www.saison-technology.com/service/product/

● HULFT、その他HULFT関連製品は、株式会社セゾンテクノロジーの登録商標または商標です。
● 記載されている会社名及び製品名は、各社の商標または登録商標です。● 記載されているシステム名、製品名などには、必ずしも商標表示（ＴＭ、®）を付記しておりません。
このカタログの記載内容は、2026年4月現在のものです。本カタログの記載内容は予告なく変更することがあります。
©Saison Technology Co.,Ltd. 2026

お問い合わせ　https://www.saison-technology.com/contact/hulft/hulft-square/